回想

ガスライトのころ

中尾美喜代
南区南太田町　横浜生まれ　無職　70歳

私は明治三十七年一月、関内の常盤町で生まれました。本年古稀を迎えるまで七十年間、横浜に在住しています。

横浜は関東大震災、戦災をうけて大きく変わり、目覚ましい発展をしてまいりました。私も関東大震災で家は焼け、父を失い、第二次世界大戦では、主人の南方出向中に焼夷弾の直撃をうけ、大きな苦労をしてきましたが、私が少女時代を過した関東大震災前の横浜は、私のふるさとです。

現代の市民生活とは大きなへだたりがありますが、なつかしい横浜の歴史の一頁をと思い、ペンをとります。

私の家は中区常盤町二丁目で、馬車道とＹＭＣＡの中間にあり、家業は提灯（ちょうちん）屋。蛇の目傘、番傘なども売り、提灯を作ります。（そのころはどの家も、手丸、弓張、高張提灯など家の紋を記した提灯を備えていました。自転車、人力車も提灯をつけて走りました。お祭りには家ごとにお祭り提灯をさげました）。その他、父はガラス金文字、彫刻、絵びら、のぼり等書きました。今は分業になっている職業です。

筋向いは芳野屋さんという呉服屋さんで、薬屋、下駄屋、豆腐屋などの店がありましたが、真向いもお隣も、大体に羽二重の輸出商が多く、ガラス戸に金文字で店名が光っていました。家の前は毎日、居留地に住む外国の人々や纒足（てんそく）した中国婦人、ターバンを頭に巻いた印度の人など、おのおのお国ぶりの服装で歩き、常時、見かけておりました。

街の四つ角にはガス灯があって、夕方になると灯をつける人がハシゴをかついできて、さっと立てかけ、するすると登って、夕暮れの町にガス・ライトが夢のようにつく。絵のような、なつかしい思い出です。（現在そのガス灯は生糸検査所の前に横浜の歴史のひとこまとして残されています）。

そのころは、自動車は一台もなかった時代、乗りものといえば人力車と自転車で、馬力などが時たま通るくらいでしたから、ほこりも立たず、生命の危険におびやかされることもなく、子どもたちは往来のまん中で、縄とび、まりつき、羽根つき、お手玉などで遊び、男の子は開戦ごっこなどして遊ぶことができました。静かな町を本を読みながら歩いて、馬のお腹につきあたったことを憶えています。

横浜公園はまことに情緒あふれるばかり。花園橋まで白い柵で、四方八方どの入口から入っても、緑の木立ちの中に山手線のように広い道があり、両側は桜の大樹で美しい花のトンネル、池あり藤棚あり、中央は一面に小砂利を敷きつめた円形広場で、毎朝早く幾人かの人が鳥かごを提げてきて、かごを開くと、ひばりがきれいな声をたてながら飛び立ってゆく。しばらくすると、また鳥かごに戻ってくる。小さい弟や妹のお守をしながら、無心に眺めたものでした。

伊勢佐木町の入口、鉄（かね）の橋（吉田橋）を渡ると、毎晩植木の市が立っていて、アセチレンガスの灯に照らされた美しい草花や植木が露を含んでいる。側では涼しげな風鈴の合奏。宵闇の中に、ほのかに美しく光っていた虫屋さんの螢の光も瞼に残っています。一鉢十銭の草花の鉢を大切に抱え、たたき売りの

おいしいバナナを買って帰ったのも、父につれられて行った夏の夜の思い出です。また伊勢佐木町には、おもちゃ屋、絵草紙屋があって、店先一ぱいに飾られた、美しい友禅模様の千代紙を、一枚何銭かで買ってもらっては、お人形の着せ替えの着物や帯などにしました。

現在市庁舎のある港橋の角は魚市場で、毎朝父が、カニやシャコ、いろいろのお魚など、文字通り鮮魚を買ってきて、料理しました。

七月四日夜の米国独立祭の花火はほんとうに素晴しく、あの仕掛花火は今は見ることができません。浴衣がけで、今の山下公園の海岸で静かに、ゆったりと観賞したことでした。

小学校は横浜小学校で、生糸検査所の先にあり、桜木町駅の対岸に、本町小学校と背中あわせに一角を占めておりました。そのころの服装髪形は、幼児はおかっぱですが、小学校ともなればお下げ髪で前髪をとって頭の上に大きなリボンを結び、メリンス友禅の着物に緋色の袴（はかま）、胸には文化勲章のように校章を絹紐でぶらさげました。式日や祝日には晴着をきて、真白いリボンをつけました。運動会にもそういう服装で体操遊戯をしたり、綱引き、かけっこをしました。私が小学校高学年のときに、横浜沖で観艦式がありました。大正天皇が横浜へ行幸になり、桜木町駅から白馬にお乗りになられて、馬上ゆたかに本町通りをお通りになられたこと、生徒が並んでお迎え申しあげたことを憶えています。その当時、本町通りのサムライ商会、弁天通りには美術商など大きなお店が軒をつらね、飾り窓を見ながら歩くのが楽しみでした。大正初期のなつかしい思い出です。

徒弟時代

伊藤由五郎
南区清水ケ丘　在住四九年　作業員　61歳

大正十三年の春の終りころであった。郷里の山形県

の盆地から横浜に出た父親たちに蹤（つ）いて、私も一緒に横浜にきた。私が横浜に永住する緒である。大震災のあった翌年で、私は十二歳であった。

そして間もなく私は指物師の徒弟となり、翌年になると、父は野沢屋百貨店に発送係として勤めだした。十三年の春ごろは、まだ野沢屋は震災でいたんだ建物に何枚もの葦（よし）すだれを垂れさげて、盛んに修理していた。父が勤めたころ、まだ女性の店員はいず、女性が店員として進出したのは昭和三年ころからだった。

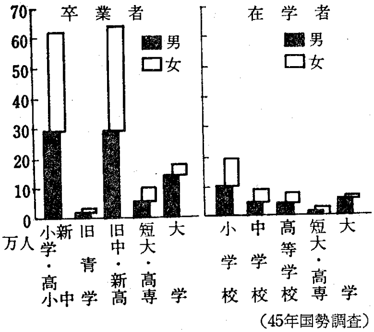
奉公に出て一年目の春、私ははじめてお花見に行った。職方やお店の番頭さんたちとともに、二合壜（びん）のお酒と駅売りの折詰め弁当、大福餅など、おのおのがまとめて棒にとおして持ち、になったり肩にかついだり交代で持ち、陽気な話をしながら、ぶらぶらと弘明寺裏の六ッ川街道を戸塚の堤まで歩いていくのだった。帰りは戸塚から鉄道に乗って保土谷停車場まできて、そこから戸部廻り日本橋という市電に乗る。

市電は二本の角のある車体で、走り出すとき〝チンチン〟と鳴った。市内電車というものを見たのも、私は、横浜で初めてであった。乗り替え券をもらうと、市内全線で料金は七銭。早朝割引きもあって、これは六銭であった。

夏のはじめごろ、横浜公園で慈善バザーがひらかれ

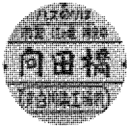
〈横浜の人たち〉

高い学歴



（45年国勢調査）

短大・高専・大学卒業者は，15歳以上の市民の15.5％で，全国平均より6％も高い。港北・緑・旭区などでは約2割にもなる。



た。野外舞台には芸能人が好演を博し、植木市や飲み物、食べ物店など、にぎやかに軒を並べ、蓄音機から流行歌を流し、近在の若い娘さんたちが、赤い襷（たすき）に前掛け姿で、バザー見物でごったがえすお客さんたちに愛嬌のある声で呼びかけていた。

見物群衆の中に、女工さんらしい人たちも目立った。彼女たちは保土谷の方の紡績工場で働いている人たちで、工場には数千人の女工さんがいた。工場の休日には、周辺の町には屋台店や縁日がひらかれ、天王町辺りは伊勢佐木町をしのぐにぎわいだった。

縁日はほうぼうでにぎわったころだが、長者町三丁目の水天宮さまも、四季をつうじて人気があった。縁日で盛大なのは、なんといっても真金町遊廓の酉の市だった。十一月に入ってからなので、それは一年の景気を煽りあげるような豪勢な観をていした。表門、裏門があって、遊里内だけでなく、横浜橋通りも、長嶋橋の河岸も、灯灯灯に彩どられた人波で雑踏した。

しかし、大衆娯楽のそろっていたのは、ハマの繁華の中心である伊勢佐木町通りだった。〝イセブラ〟という言葉は、庶民に深く親しまれていた。歌舞伎の劇場に喜楽座というのがあり、震災前には全盛時代の九代目市川団十郎、五代目尾上菊五郎、四代目市川左団次など、私はついに見物できなかったが、来演したものだという。喜楽座と向いあわせの朝日座では、万歳や安来節などよくかかっていて、喜楽座の隣の寿亭という寄席には、落語、浪花節がかかり、昭和初期に綾太郎、虎造など熱演した。活動写真は、私ら少年には唯一の楽しみだった。横浜電気館、又楽館、オデオン座、敷嶋座などあって、電気館、又楽館は日活系で、尾上松之助が人気があり、女優では浦辺粂子だった。当時は女形が出ていたのに、純然たる女性の活動写真俳優なのも珍らしかった。つづいて帝キネの歌川八重子、松竹の栗島澄子など、船頭小唄、籠の鳥の流行歌の映画化で人気を集めていた。角力常設館は電気館の筋向いにあって、東京の大相撲がかかった所。だが平常は松竹の封切館で、栗島澄子や沢村四郎五郎などが

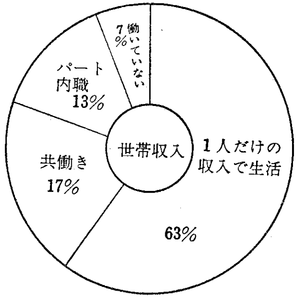
看板俳優だった。昭和初期に入ると林長二郎（長谷川一夫）が俄然人気をひとり占めにした。マキノ映画が電気館で上映されるようになって、阪東妻三郎、月形龍之助などの人気俳優が登場した。嵐長三郎、片岡千恵蔵、市川右太衛門などがつぎつぎと売出しはじめたのもこのころからだった。

私の郷里の盆地は海のない所なので、海水浴を楽しんだのも横浜が初めてである。故郷では水泳といえば、近くの川か少し歩いて最上川まで行く。高瀬山という小山のすそをめぐって行くのだが、途中に桃畑が沢山あり、たわわに実った桃を捥（も）ぎっては丸かじりしながら行くのは楽しいものであった。横浜へきてからは富岡海岸、小港十二天、間門海岸などでよく泳いだ。間門海水浴場は、市電を降りるとすぐにあって、ながめのよい綺麗な海浜だった。富岡では泳ぎ遊びながら形のよい蛤（はまぐり）が沢山とれ、磯子の海辺ではカレイやヒラメの稚魚がひたひたと寄せる藻にからんで無数におり、手で掬っては海水ごと罎に入れて持ち帰ったものだった。夜はまだカンテラを点けて浅瀬に入り、チンチン（黒鯛の子）をヤスで何尾も捕ったおぼえもある。

山下橋付近では小船を出して、浮泳してくるワタリ蟹（かに）を手網でたたくようにして捕り、昼は近くの岸壁でハゼがよく釣れた。子どもらの竿の先に小鈴

〈横浜の人たち〉

世帯の働き手



（49年4月　都市研調査　N＝915）

主な働き手が1人だけという世帯は，全体の63%，主婦がパートや内職をしている世帯は13%，市民の平均年齢が若いこともあって，共働きが17%もある。

が付いていて、ハゼがかかると鳴る仕掛けになっているのである。山下の海辺は震災のときの瓦礫や残土で埋め立てているときで、草原も多く、夜は淋しい所だったが、此所で黒鯛の型の良いのが釣れたものだ。山下公園は昭和二年ころに完成。私が横浜へきて覚えた大事なものがある。横浜貿易新報の貿易俳壇を見よう見真似で覚えた俳句である。今は神奈川俳壇に投句をつづけているが、当時の顔ぶれ（俳人たち）が全く姿を消してしまったのが淋しい。

新緑の椅子の詩人は港が好き

十一人の子どもたちと

小川スミ

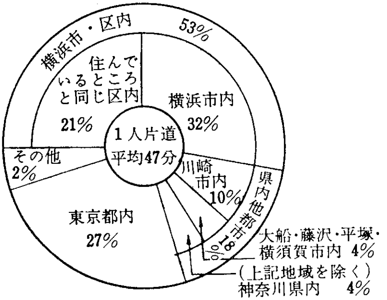
鶴見区市場大和町　在住五〇年　無職　75歳

私が横浜に参りましたのは大正十三年ですから、もう足掛け五十年横浜に住みついていることになります。人生の三分の二を過していれば、横浜を第二の故郷といってもよかろうと思っています。この長い五十年間、三回ほど移ってはおりますが、ずっと鶴見区内に住み続けてきました。

主人と六歳を頭に三人の子どもとともに、品川より

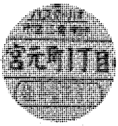
〈横浜の人たち〉

通勤地と通勤時間



（48年2月　都市研調査　N＝997）

勤めている人の通勤時間は，平均，徒歩を含めて片道47分。周辺区では，片道1時間以上の人が約半数もある。

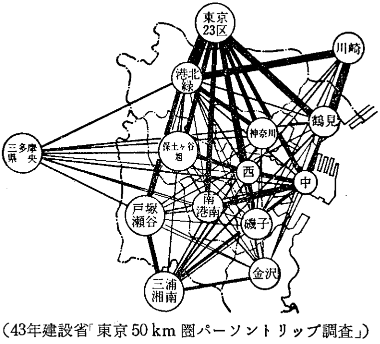


初めて鶴見は東寺尾に参りましたころといえば、家の近くには人家がとても少く、道幅も狭くて、空地には萱（かや）が茂っていて、それは淋しいくらいでした。しかしどこの川もきれいで、素手でもすくえるほど魚がいて、よく子どもたちは魚を、ときには亀までつかまえてきては、飼って可愛がるというふうで、自然には大変恵まれた、教育上はとても良い環境でした。そのころ、軒数こそ少なかったのですが、既に豊岡通りには種々商店が揃っていて、いくぶん賑やかで木造の豊岡小学校もありました。買物には豊岡まで出るのですが、バスとてなく、それかといい、当時まだ自動車を使うことなど全く常識では考えられない時代でしたので、子どもたちを連れては徒歩で往復一時間余りをかけて豊岡まで参りました。それでも別段不便をさほど覚えませんでしたのが不思議です。

四月ともなると総持寺本山の桜が見事でしたので、子ぼんのうの主人は私と子どもたちとを連れて、一家揃って手作り弁当にサイダーでお花見をしたものです。桜の木の下で子どもたちに写生をさせたり、絵本を読んで聞かせたりして、一日を子どもたちと楽しく過したことが、只今でもほんの昨日のできごとのように思い出されます。もちろん現在のような娯楽施設とて特別あったわけでもございませんのですが、遊びに勉強を折混ぜての、心ゆくまで子どもたちの心に直接

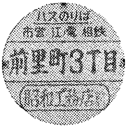
〈横浜の人たち〉

強い東京との結びつき



（43年建設省「東京50 km 圏パーソントリップ調査」）

市内各区からの交通は，全市的に東京との結びつきが強く，とくに鶴見・港北・緑区などではこの傾向が強い。



触れてやれることのできたことは、本当に収穫だったと思っています。紅葉のころがまた同じようで、四季折々の風情を子どもたちに膚で味あわせえたことは素晴らしいことでした。

そのころ、家庭にはまだ水道がなく、井戸水を常用していました。特に飲料水は近くの稲荷さんの清水を使用することが多く、朝夕汲みに行く手数がありました。この水汲みにも子どもたちの年齢に応じてそれぞれの仕事があって、小さい子は小さなバケツで汲んでくる、大きい子は桶（おけ）という工合に、生活の一コマ一コマが子どもを交えての楽しいものであったことが、現代以上に家族意識を強めていたことかもしれないと思えるのです。人口が急激に増加し、便利なものが次々と工夫されてくると、真剣に考えなくてはならない親子関係をはじめとしたいろいろのことなども、しごくあたりまえとなり、さらにはなおざりにされ易くなったようなことは、文明の進歩と裏腹の結果を生んでいるよう思えてならないのです。

孟母三遷の教えとまでは参りませんが、主人は子どもたちの環境を考え、小学校に近いところに家を建てて居を定めたいと、常日ごろ口癖のように申していました。

大正十五年も暮近く、主人三十七歳、私が二十八歳のとき、それまでの希望がかなえられ、潮田小学校に二百メートルほどの現在の向井町に家を新築して移って参りました。ここも東寺尾と同じようで、付近に人家がまばらで、すき透った川には藻が生い茂り、泳ぎ廻る魚は今でいう水族館の魚のようにさえ見えたものでした。夏の夜にはその川辺に螢（ほたる）の飛び交う姿も珍しくはなかったのです。

当時は鶴見も自然そのままで、春には高い空に一点小豆粒ほどの姿となったヒバリが、わが世とばかり胸もはりさけんばかりの声をはりあげて啼いているのが聞えたものでした。ヨシキリの啼くのも聞えれば、ウグイスのさえずりも至って普通でした。

家の裏庭の続きは一面の田で、苗代のころから田植

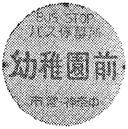
え、田草取り、取入れの系統だったお百姓の作業振りもよく見られたものです。お米のできるまでのお百姓の辛苦を実地教育として、子どもたちによく見せました。秋にはいると蝗（いなご）取りもきまって子どもたちにやらせました。発育盛りの子どもたちの蛋白源としての蝗を、大変重宝して参りましたのもこのころでした。

交通事故など全く考えなくてもよい時世の賜物とでもいえましょう。子どもたちを伸び伸びと戸外で、しかも新鮮な空気を胸いっぱいに吸わせてやることのできたのも、今のお母さんたちには甚だ申しわけないようにさえ思うのです。

このほか芹（せり）摘み、もちぐさとりと野や川にちょっと出れば、自然の幸に恵まれたものです。これは直ちに一家団らんの食膳にのぼりました。

六月初め、潮田神社の祭礼がありました。そのころ、ちょうどそら豆が出はじめるので、今でもそら豆が出ると、きっと過ぎた昔の祭を思い出すのです。神社の近くで、月三回夜店が開かれ、子どもたちはとても楽しかったようです。電気とてあまり用いず、アセチレンの一種独特の臭いの、あのほの暗い光の下に並べられた商品の数々。夕食後、会社より帰った主人が子どもたちを連れてバナナのたたき売りを見ては、買ってくるのが習になっていたものでした。大房の立派なものが僅か五、六十銭という、今では想像もつかない安かったそのころが大変懐しくもあります。一方子どもも九人となり家族十一人の大世帯となっていました。

現在の所に再び新築したのが昭和十年ですから、かれこれ四十年になります。ここでまた二人の子どもができ「産めよ増やせよ」の国策に忠実に従ったわけではなかったのですが、都合五男六女の子福者になりました。厚生大臣、県知事からそれぞれ表彰されたことを、今でも一つの誇りとしています。何せ十一人の子どもは全て横浜（鶴見区内）の小学校に入れました。



回想録

ヘルマン・グラウェルト

中区新山下一丁目　横浜生まれ　医師　69歳

一八五八年に横浜に外国人居留地が開かれるまでは、品川の幕府との協議はぐずぐずとらちがあかず、非常にむずかしい時期にさしかかっていた。問題は浦賀・江戸・神奈川・横浜のうちのどの港を開くかであった。一八五八年に長崎の出島からきていたジャン・ヘンドリック・ドンカー・クルティウスを団長とするオランダの協議団のメンバーのなかには、ヘルマン・ルドイッヒ・グラウェルト（筆者の父）やウィルヘルム・ハインリッヒ・グラウェルトもまじっていた。出島への帰途、団員達は神奈川から現在のホテル・ニュー・グランドのあるところまで徒歩ですすみ、沖に停舶している「咸臨丸」（旧称「日本」）にもどるために幕府の護衛付きで水田を歩いて帰っている。

一八五九年七月一日に外国の代表団が横浜に到着した当初、この小さな貧しい漁村の、未開で退屈な雰囲気のなかでの事始めは、憂うつな仕事であった。多くの者がそれをいやがった。彼等に対する当時の村民の敵意のなかで、彼等は日夜メランコリーと失意に見舞われ、同病相憐れむ仲間も励ましとはならず、耐える

〈横浜の人たち〉

働く人と地位の割合

都市名	総数	雇用者（従業者）	役員	人を雇っている業主	人を雇わない業主	家族従業者
	%	%	%	%	%	%
東京都区部	100.0	72.2	6.9	4.7	9.2	7.0
大阪市	100.0	70.6	4.6	5.8	10.4	8.5
横浜市	100.0	80.8	4.6	3.3	6.4	4.8
名古屋市	100.0	73.2	5.0	4.3	9.6	8.0
京都市	100.0	67.2	4.9	5.2	12.5	10.3
神戸市	100.0	75.4	4.1	4.6	8.9	7.1
札幌市	100.0	79.1	4.7	3.6	6.9	5.6
全国	100.0	61.1	3.1	3.2	16.6	16.3

（45年国勢調査）

横浜では，雇用者の割合が非常に高く，技能工や単純労働者などいわゆるブルーカラー層が川崎・北九州についで多い。

浄水場前

ことは困難なわざであった。多くの者が出て行き、代りの者が押しかけてきた。この港町に外国人がつぎつぎときて、つぎつぎと出て行った。初めてこの寒村の浜辺の土を踏んだ者はバラ色の希望に満ち「エデンの楽園」を期待したが、ある者はたちまち極端な落胆に陥り、ある者はしごく元気で勇敢な人生の伴侶を見つけ、また孤独な生活に耐えきれずに絶望に打ちのめされた者もいれば、たちまち居心地のよさを覚えた者もおり、いろいろであったが、誰にとっても最大の喜びは、到着した船に〝突入〟することであった。入船と同時に競争が一斉に開始され、工具類、あきびん、パン、ビール、帽子、靴などから貴重品や無価値な品物、はてはホットケーキのような物にいたるまで、船に積まれているありとあらゆる物品が競売の対象となり、代価は金（きん）で支払われた。材質や材料の状態などは二の次であった。一円は一ドルだった。群がって競争する群衆に対して、最後の品物が船からとりおろされたのちは、売手にとってはおとぎの国であった。一例をあげると、「特権筋」の強い求めによって、途方もない値段がベッドに対してつけられた。相当の額の金（きん）がこの国から絞りとられたわけである。

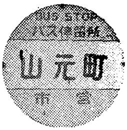
　このうらさびしかった漁村が「横浜ショッピングセンター」に変身すると、今度は様々な国籍の租界地の

〈横浜の人たち〉

働く人の職業別構成

都市名	総数	ホワイトカラー層	ブルーカラー層	販売従事者	サービス職
	%	%	%	%	%
東京都区部	100.0	41.0	33.5	15.6	8.5
大阪市	100.0	37.0	36.8	17.2	8.9
横浜市	100.0	32.5	46.0	12.4	9.1
名古屋市	100.0	33.3	41.2	16.4	9.0
京都市	100.0	30.6	42.0	17.2	10.0
神戸市	100.0	33.0	43.0	13.8	10.2
札幌市	100.0	35.8	35.1	16.6	12.5
北九州市	100.0	28.5	49.3	13.1	9.1
川崎市	100.0	28.0	55.1	9.3	7.6
福岡市	100.0	36.4	34.7	18.0	10.8
10大市平均	100.0	36.9	38.0	15.6	9.6

（45年国勢調査）



区分けがなされた。各租界はどちらかといえば互いに敵対心を持っていた。よその租界を通り抜けたり、しばらくの期間そこにとどまっているということは、実際容易ではなかった。そこで現在の前田橋（中華街の一部）の近くに国際地区ともいうべきものがつくられ、そこでは日が暮れると毎日のように酒気を帯びた船員達が、血なまぐさいいさかいを起こした。そのため旧横浜村の住民達は、その地区を「血の町」と呼び、そこに住んだり、そこを訪れたりする日本人は、恐怖心をあおられた。世論はもとより、幕府も侵略ないし植民化の印象を受けていた。そこで、世界との貿易は、日本の立場を改善することになろうと述べて、横浜開港を主張した井伊直弼〈掃部（かもん）と称した〉が暗殺された。伊勢山にある彼の像は、百年以上も前に、進歩のために国賊の汚名をきせられた井伊直弼の苦闘をいきいきと物語っている。

　当時、すでに日本人は外国のスポーツ、特に射撃と競馬に強い関心を持っていた。現在の中央病院のある場所に競馬場ができたときには、日本側の協力はなみなみならぬものがあったし、また日本人自身もすでに立派な騎手を持っており、レースに勝つこともよくあった。日本人は外国人が競馬という娯楽に示す大胆さと技倆を大いに賛嘆し、外国の騎手に一目おいていた。日本人の騎手が使う鞍（くら）はひどいもので、たちまち馬も乗り手も疲れさせてしまうようなしろものであったが、それでも騎手は優秀といえた。一方、外国人の方は、現在の八幡橋の近くにあった古い庭園をそなえた有名な「オイスター・マリー」という料亭の粋な味わいを賛嘆した。この料亭では、湾からとりたての新鮮なカキを食べさせたが、どの国の外国人にも、ここは人気のある場所だった。

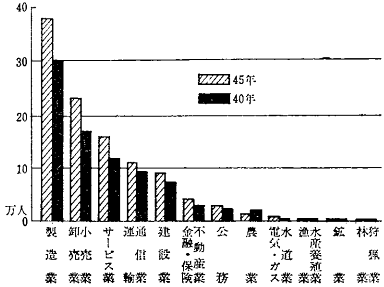
　外国人居留地に入る四つの門のうち、もっとも有名だったのは前田橋門で、ここから入る者は英国兵にじろじろと監視された。この門は通称「フランス山」の裏手に当っていたが、この山は今では飛鳥田現市長の先見の明により美しい「港の見える丘公園」という行

楽地となって復活している。ところで、一五八七年のキリスト教禁止令と、それに続く一五九七年の長崎の殉教以後とだえていたキリスト教を呼び戻す目的で、「天主堂」と称する最初の教会をあえて建立したヘルマン・ルドウィッヒ・グラウェルトに対する一八六一年十一月二十日の悲惨な血なまぐさい暗殺計画の前に、暗殺者がこの門を使っている。十九世紀の日本において、キリスト教の復活を、徳川幕政下にてこころみるということは大変なことであった。幕府はキリスト教の復活を力づくで禁じており、あらゆる町かどや人の集まる場所には、そのような運動をしたり、運動を背後から支援する者は断首に処す、という「禁制札」を立てていた。そのような大きな身の危険に直面しながら、グラウェルトは天主堂建設のための用地と、いっさいの建設費用を寄進したのであった。それは死を意味する行為であった。フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト博士は、多量の出血による瀕死のグラウェルトの死を一時的には引伸ばすことに成功はしたものの、ついにはそれに屈したのだった。明治天皇は、対外通商交易の側近顧問であったグラウェルトを悼んで、その死の床へは侍医のアーウィン・バエルスをさしむけ、またその葬儀の場へは銀の月桂樹の花輪を贈られた。

開港当時、「フランス山」の下のフランス領事館は

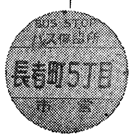
〈横浜の人たち〉

産業（大分類）別にみた働く人



（40・45年国勢調査）

働く人の多い産業は製造業（就業者総数の35.5%）で，全国平均より10%も高く，農業の割合（同1.5%）が低い。



運河岸壁のふちの真上に建てられ、階段が下の方へ伸びる造作になっていた。このことは注目に値する。前面には街路は全然なかったわけで、現在の運河の上の灯火もにぎやかな幅広い道路とは非常にかけ離れていた。

横浜の山手は初めのころは未開のジャングルで、キジ、シギ、ウサギなどの猟場だったが、一九二三年九月一日の大震災のころまでには早くも美しい洋風の田園都市へと発展していた。山手の入口には、谷戸坂をのぼった所に「Gaity」と呼んでいた社交場があった。山手は空気がきれいで汚染問題などがないことで有名だった。現今に比べると昔はホテルはほとんどなく、水ぎわには一軒の倉庫もなかった。東部の断崖を海の波が洗い、鶴見・川崎にはまだ工場はなかった。有毒な亜硫酸ガスもなければ、一酸化炭素（自動車洪水）もなかった。米国製のフォードがFrazer & Co.により初めて輸入されたのは一九〇〇年だった。「横浜ぜんそく」などは聞きなれない病気だった。

間門や本牧の海水浴場は良い所で、日本の上流社会の人たちはもとより、外国の上流社会の人たちもよく出かけた。残念ながら現今は港湾設備や荷役設備に場を奪われて、子どもたちが遊べる浜辺はなくなっている。ただ、昔の横浜の美しさを残している場所が一カ所だけオアシスのように保存されている。三溪園である。ここには原富太郎が横浜に持ち込んだ由緒ある歴史的建物が幾つかあり、日本の壮大な過去をしのぶ貴重な記念物となっているが、これは横浜市が大切に保存してきたものである。花壇、遊び場などもあって、レジャーやピクニックを求めるすべての人たちに素晴しいレクリエーション・センターとしての場を提供しており、三溪園は横浜の誇りとなっている。

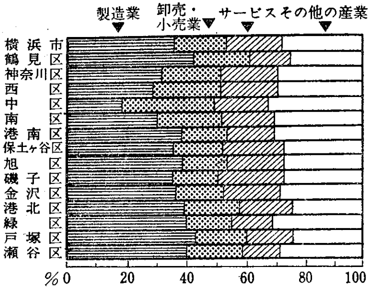
大震災の起る直前ころのホテルはといえば、テントでつくったホテルで「テント・ホテル」と呼ばれたものだったが、震災をさかいにして、がらりと一変した。再建工事、商業、貿易、個人の所得増のために、幾多の美しい場所が犠牲にされた。科学の進歩は人間

の寿命を伸ばしているが、他方、人間のどん欲さに復讐されており、工場や自動車からはき出される汚れた空気を吸い込む結果、身体の機能が急速に病弱化してきているにもかかわらず、財布を札束でふくらませることのほうに熱心になっている。人体の病弱化は一刻も早く汚染環境をなくすことによって回復は可能であるが、この大事な時期をあと数年も引伸ばしておいてはならない。住民の健康診断の結果は呼吸器系統、血圧、皮膚、循環器系統（肝臓や腎臓など）、神経系統などに悲惨な影響が出ていることを示している。耳鼻咽喉科の病院が現在ほど満員になったことはこれまでなかった。公害が新しい要因として加わるようになってからは、風邪に対してこれまで効力のあった治療法もきき目がなくなってしまっている。合言葉は「公害に葬られるより前に公害を葬れ！」である。

しかし有難いことに、横浜の有能な指導のおかげで、公害や自動車問題に対する対策として、緑の遊園地やその他のセンターが芽を吹き出しつつある。スポーツセンターや地下鉄は、進行中であり、観光客のための港湾設備は整備されたし、過激な成長開発による神経を激しくきしませるような、騒音を防止することによって、著しい改善もなされてきている。エネルギー危機の結果、汚染規制をゆるめようとする動きもあるが、そのような規制緩和はなされないだろう。横浜

〈横浜の人たち〉

働く人の区別産業分布



（45年国勢調査）

各区とも働く人の7割前後が，製造，卸・小売，サービス業に従事し，西区と中区以外は，製造業の割合が1位を占める。

は、産業の中心地ではあるが、環境防衛策をすすめなければならないという必要性は、横浜の風致地区の景観がそこなわれ、樹木が伐採されるという理由で、山手に高層マンションの建設を容認しないという事実によってすでに現実化されている。新たな化学要因に対する汚染防止規制をはじめ、異常な物価高に悩む家計に対する必要策としてのインフレ対策措置も計画されている。

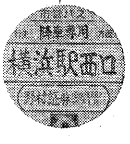
横浜の景勝地の一つである外人墓地は、現指導者の精力的な努力のお蔭で荒廃化から守られ、この港町の歴史上の記念物の現状のままの保存が慎重になされている。この墓地は歴史的価値のあるものとして、国宝に指定されるべきである。

公立病院や衛生状況の改善、交通のじゃまになる路面電車の廃止、その代りの地下鉄建設などは注目に値する救援活動である。自動車事故を防ぐには、運転免許取得試験に徳性試験という考えかたも取入れられてよいことであろうし、アルコール中毒者も除外されるべきであろう。

日本人の最も友好的な性格は、大戦と戦後の進駐や占領の余波を受けてある程度打撃をこうむったとはいえ、その本来の素晴しさに戻ると思われる。特に今の若い世代は、日本にとってはあまり望ましくない西洋の様式に悲しくも感化されて、大戦後、妙なふうに変ってしまった。したがって、少々思い上って、強情で、なまいきで、だらしない態度に対して、教師や親の役目も一層むずかしくなっている。

最後に現代の若者に一言―酒やタバコはあまり口にしないこと。麻薬はいけない。適度の道徳教育を身につけ、先生にはもっと敬意を払い、親にはもっと謙虚になって欲しい。でなければ、結局、何もかも失くしてしまうことになる。

一方、いっさいの悪は不服従と不実から生じるものであることをわきまえれば、横浜だけのためではなくすべての者のためにも、輝かしい褒賞と、鉄のように強靱な健康と、黄金の未来がもたらされるであろう。



（この原稿は、英文で書かれたものでしたが、白書編集委員会の責任で翻訳しました。）

昔は良かったか

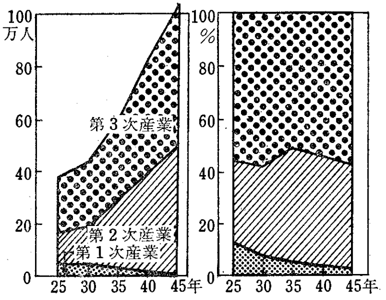
磯部栄吉
旭区本村町　横浜生まれ　無職　62歳

「昔の横浜は良かった」という言葉を口にするのは、だいたい五十代以上で、戦前から横浜で暮していた人が多いようです。ただし、この「良かった」という言葉の意味が、人によってマチマチで、ある人はただ漠然と良かったと思うので、他の別人は、昔の町内の人たちや隣人に善意の人が多かったという意味で、また中には、盛り場としての伊勢佐木町に、たまらない魅力を感じて、それが忘れられず、いまだに当時の印象を抱いている人もあるようです。

私もそれらの人たちと同じように、昔の横浜の良かった数々の点を、大切な懐かしい思い出として胸に秘めております。私が特に良かったと思うのは、やはり盛り場として見た伊勢佐木町で、銀座と浅草を一緒にしたような独特な雰囲気が、気軽にだれにも親しめる場所として、いつまでも忘れることができませんでした。まだトーキイのないいわゆる無声映画の全盛時代で、電気館、又楽館、オデオン座、角力常設館、世界

〈横浜の人たち〉

産業別人口の変化



（各年度の国勢調査）

昭和30年以降，製造業やサービス業など２・３次産業人口が急増，農林漁業など１次産業人口数とその割合は年毎に減っている。

館といった映画館は、当時の青少年にとっては砂漠のオアシスのようなもので、限りないロマンを夢見る場所でした。私もよく兄や友人と、これらの映画館に行ったもので、善悪ともに映画の影響は大きいものがありました。今は娯楽の過剰時代で、レジャーにこと欠きませんが、そのころは、せいぜい映画、芝居（今の演劇）と寄席ぐらいでしたから、映画館と芝居小屋の集中した伊勢佐木町は、手ごろな市民のレジャーを楽しむ場所があったわけで、こうした娯楽設備のほかに、いろいろな飲食店の存在が、市民の多くを、ここに集めた理由だったと思うのです。

そういった良かった反面、今と較べて悪かった点も多かったことは、いうまでもないことで、その例をあげれば、まず道路の悪かったこと。市内の大部分の道路は未舗装で、下水道も不完全なので、ひとたび大雨が降ると、たちまち家屋への浸水騒ぎか、泥んこ道路になって、長靴でも履（は）かないことには歩けない有様。逆に晴天が続くと、こんどは塵埃が舞いあがって眼もあけられないことになるのです。市内の交通機関は、主として市営電車かバスかで、電車もバスもなかなかやってこないので、近距離だと待ちくたびれて歩いてしまうことが多く、朝夕はその電車が満員で、うっかり奥に入ると、自分の降りる停留場で降りられないという笑えない悲劇になるのです。

当時の娯楽の首座にあった映画館はどうかというと、一流館は別として、三流館あたりは粗末な長椅子が並べてあるだけで、大入りのときは、この長椅子も取り払われて、定員の規則を無視して、どんどん詰め込むので、後方の観客は立ったまま長時間見なければならないので、今の人には想像もつかない苦痛に耐えなければならないのです。

以上のようなことから、昔の横浜が、なんでも良かったという俗説が、まったくいい加減なものであることが、おわかりになったことと思います。

なんといっても、経済の向上で、われわれ個人の生活が豊かになり、生活をエンジョイすることができる

ようになり、それとともに、公共施設も立派なものが整備されて、音楽、美術、演劇などが観賞できる会館やホールであるとか、昔の市役所に匹敵するような設備の良い区役所がドンドン建てられるといったふうに、本当に良くなってきました。特に最近は交通が便利になり、どこに行くにも足の不便を感じることが少くなりました。現在工事中の地下鉄が完成したならば、市民の行動半径はさらに延びて、戸外活動はより便利に効率的になることでしょう。

福祉の点でも、昔には想像もつかなかったものが出現しております。私の住んでいる旭区には、区内から出るゴミを焼却する清掃工場があって、その余熱を利用して温泉にしており、それが老人福祉センターとして役立っております。私も老人の資格で、ときどきこの温泉を利用しておりますが、ここに見える多くの老人が、心から喜んでいる姿を見ると、このような施設のある現在ほど、昔の横浜では考えられなかった良さだと、思わないではいられません。

しかし、良いことばかりでもありません。それは横浜の市街の汚ないことで、川も道路も公園も丘も山も、到るところ紙屑や空き缶（かん）が散乱しており、これが人間の住むところかと疑いたくなります。日本人は個人生活では、礼儀正しいのと清潔好きで定評があるそうですが、それが集団生活、社会生活になると、全然その反対になるというのは、どういう訳でしょうか。

理由はともかくとして、自分たちの住む環境はきれいにして、気持ちの良い生活が送れるようにしたいものです。昔の横浜が、後代の人たちに良かった、といわれるのは、その時代に生きた市民が、その時代なりに一生懸命努力したからで、現代に生きるわれわれ市民が、これと同じように、よりよい横浜の建設に努めるならば、二十年、三十年の将来に「昔の横浜は良かった」という言葉を、耳にすることであろうと思います。